The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井履軒『大学雑議』の思想史的位置
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2009, 49, p. 1-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11428
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中井履軒『大学雑議』の思想史的位置

湯浅邦弘

序言

江戸時代の大坂学問所「懐徳堂」は、関西の知の拠点であった。特に、第四代学主中井竹山とその弟履軒の頃に全盛を誇り、多くの学術的成果を上げた。本稿では、この内、中井履軒の『大学雑議』を取り上げ、その思想史的位置を明らかにしたい。

なお、本稿の作業は、現在、中国と日本で進められている「儒蔵」編纂事業の一環として推進したものである。そこで、まず、「儒蔵」編纂事業とは何かについて簡潔に紹介しておきたい。

一　「儒蔵」編纂事業

中国の思想史は、三教交渉に特色があると言われる。先秦時代は、儒家を中心に、墨家・道家・法家・名家などが活発な活動を展開したが、漢魏以降になると、老荘思想や民間信仰を基とする道教、およびインドから伝来した仏教が優勢となり、ここに儒教と合わせて三教鼎立の形勢が確立する。

その後、この内の道教については、関係文献を集大成した『道蔵』が唐代に編纂され、また、仏教については南北朝時代に『仏蔵』が

編纂されている。ところが、儒教については、五経や四書の刊行はあったものの、儒教経典を網羅する全集の刊行は、意外にも、これまでなされてこなかった。

そこで、二〇〇三年、北京大学の研究者チームが中心となって、儒教全集「儒蔵」の編纂計画を立案した。精華版と完全版の二種に分け、精華版は関係文献約五百点（約一・五億字分）を収録し、二〇一〇年の完成を目指す。また、完全版（約十五億字分）は現存する儒教経典・文献をほぼすべて網羅し、二〇二〇年の完成を目指す。いずれも、紙媒体（冊子）で刊行するとともに、最終的にはデジタル版の発行を予定している。

この計画は、日本の学界にも協力の要請があった。すなわち、日本各地に伝存する重要漢籍について、中国版と同じように編纂作業を進め、順次、「儒蔵」に組み込んでいくという計画である。中国側から要請を受けて編成されたのが、「儒蔵」日本編纂委員会であり、顧問が戸川芳郎氏、委員長が大島晃氏。日本側編纂委員は全国で十名。対象文献は、藤原惺窩から竹添井井まで約四十～五十種が候補とされた。第一回の委員会が大東文化大学で開催されたのは、平成十八年十月八日、筆者も委員の一人として列席した。

会議では、候補とする文献の一覧、編纂委員とその役割分担などが明らかにされた。また、平成十八年十月までに協力者を確定し、同年十二月までに底本を選定するよう指示があった。さらに、平成二十年九月を第一期分の締切、平成二十一年三月を第二期分の締切とすることも確認された。筆者が担当することになったのは、懐徳堂四書、具体的には、中井履軒の『大学雑議』『中庸逢原』『論語逢原』『孟子逢原』の四点、総字数は、約三十五万五千字である。

具体的な作業は、各文献について解題を執筆すること、底本と異本とを対照し、その校勘の結果を記すこと、底本に現代中国式の標点を付すこと、が主な内容である。

これを受けて、筆者は、懐徳堂研究に実績のあるメンバー十四名に呼びかけ、協力者への就任を要請した。要請に応じていただいたのは、以下の各氏である（所属・職名は平成十八年現在）。

寺門日出男（都留文科大学教授）
竹田　健二（島根大学教授）

杉山　一也（岐阜経済大学准教授）
藤居　岳人（奈良工業高等専門学校准教授）
矢羽野隆男（四天王寺国際仏教大学准教授）
湯城　吉信（大阪府立工業高等専門学校准教授）
久米　裕子（京都産業大学准教授）
井上　　了（大阪大学懐徳堂センター職員）
池田　光子（大阪大学助教）
前川　正名（台湾・致遠管理学院助理教授）
佐野　大介（台湾・明道大学助理教授）
黒田　秀教（台湾・明道大学助理教授）
上野　洋子（日本学術振興会特別研究員）
草野　友子（大阪大学院生）

メンバーによる第一回会議を開催したのは、平成十八年十二月十六日。大阪大学で、「儒蔵」編纂事業の概要を説明し、テキストの選定と事業分担について検討した。その結果、懐徳堂四書については、『日本名家四書注釈全書』本を底本とし、大阪大学懐徳堂文庫所蔵中井履軒手稿本を対校テキストとすることが決まった。また、『大学雑議』については、筆者が一人で担当することになった。

その後、「儒蔵」日本編纂委員会との連絡調整を経て、平成十九年十二月、編纂委員会から底本の全コピーが送られてきた。これを受けて、第一期提出分として、『大学雑議』『中庸逢原』『論語逢原』の三点について作業を開始した。

二　中井履軒『大学雑議』

そこでまず、『大学雑議』について、「儒蔵」編纂事業の具体的成果を以下に示しておきたい。（一）が解題であり、（二）が標点・校勘の結果である。

（一）解題

中井履軒（一七三二～一八一七）は、懐徳堂第二代学主を務めた中井甃庵の第二子。懐徳堂第四代学主中井竹山の二歳下の弟である。名は積徳、字は処叔、通称は徳二。履軒あるいは幽人と号した。

享保十七年（一七三二）、懐徳堂内で生まれ、兄竹山とともに五井蘭洲に朱子学を学んだ。五井蘭洲とは、初期懐徳堂において助教を務めた学者で、竹山・履軒の師である。初代学主三宅石庵の学問が、朱子学・陽明学・古学などを混在させる折衷的な性格を持ち、「鵺学問」と評されたのに対して、蘭洲は、第二代学主中井甃庵とともに、朱子学を懐徳堂の基本路線として確立した。

その蘭洲に学んだ竹山が懐徳堂学主として活躍したのに対し、履軒は後に懐徳堂を離れて私塾水哉館を開き、そこで膨大な経学研究を展開した。初め履軒の経学研究は、「逢原」と称して草稿を書き始めたようであるが、この書は現存していない。その後、その草稿を基に、既存のテキストの欄外に自説を書き加え、三十年の歳月をかけて『七経雕題』を著した。その後、『雕題』を整理して、『七経雕題略』とし、晩年に至り、最終的には『七経逢原』として完成させた。これが履軒の経学の最終形態である。ただ、『雕題』は、比較的早く世に知られたが、『逢原』は一部の高弟のみに閲覧を許したため、余り知られることがなかった。

履軒の研究は、脱神話、脱権威の批判的実証的精神に貫かれており、富永仲基・山片蟠桃らとともに近代的英知の先駆的存在であると評価できる。一方、履軒は自らの住まいを、中国古代の聖王黄帝が夢の中で遊んだというユートピア「華胥国」になぞらえ、自らを「華胥国王」と称して、経学研究とは異なる思いを多く書き記した。そうした著作として、経世面では『華胥国物語』『あらまほし』、科学面では『越俎弄筆』「天図」「方図」、歌文面では『華胥国歌合』などがある。文化十四年（一八一七）、八十六歳で没。謚は文清。

『大学雑議』は、朱子の『大学章句』を基に、それを大きく改訂する点に特色がある（この点については、本稿第四章で改めて詳述する）。

ただ、履軒は四書の内、『大学』については余り評価していなかったようで、『中庸』『論語』『孟子』については、みな注釈の名を「逢原」と称しながら、ひとり『大学』についてのみ、「雑議」と命名した。しかし、決して注釈を粗略にしたという訳ではなく、それぞれの文章・語句について、詳細な注を付している。

本書が刊行されたのは、大正十一年（一九二二）。『日本名家四書注釈全書』に収録された。関儀一郎の設立した東洋図書刊行会が、中井木菟麻呂（履軒の曾孫。号は天生）所蔵の四書抄本（すなわち『大学雑議』『中庸逢原』『論語逢原』『孟子逢原』）を借り、活字に組んで刊行したのである。同全書に収録された『大学』関係文献としては、他に、伊藤仁斎『大学定本』、荻生徂徠『大学解』、井上金峨『大学古義』、古賀精里『大学章句纂釈』などがある。

『大学雑議』については、木菟麻呂が、履軒手稿本を底本として、履軒の高弟・三村崑山の手写本によって校訂し、かつ校点を加えたものを収録している。『日本名家四書注釈全書』は、冒頭の「例言」においてこの点に触れ、「本書は中庸逢原とともに未刊なりしを、天生氏の好意によりて、本全書に収むることを得たり。謹んで謝意を表す」と記している。

なお、以下に、大阪大学懐徳堂文庫所蔵中井履軒手稿本『大学雑議』（本稿三十六頁図版参照）の書誌情報を記しておく。

『大学雑議』一冊

〔寸法〕二十四．五×十六．〇cm。郭内十八．三×十二．四cm。

〔書式〕左右双辺、有界の紙を使用。九行二十～二十三字。注は一格低くし小字で毎行二十五～三十字。

〔版心〕白口。無魚尾。横一線。各篇の冒頭のみ朱筆で篇名。

〔内題〕「大学雑議」。

〔外題〕書題簽「大学雑議」。帙題簽「大学雑議　履軒手稿　七経逢原ノ内　全十函　第十函　一本　七経逢原ノ内」。

〔奥書〕なし。

〔印記〕「天生寄進」「懐徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」。受入印「昭和29.12.22受入　104922」。

〔装訂〕四針眼訂法。

〔備考〕巻末に「大学　天楽樓章句」を付す。

〔蔵書票〕「遺　5　187」。

〔付箋番号〕「627」。

（二）標点・校勘

【凡例】

・『日本名家四書注釈全書』所収『大学雑議』を底本として、その標点・校勘を付す。

・標点は、「儒蔵」編纂事業の原則に従い、日本式の句読点「、」「。」によらず、現代中国式の標点による。主なものは次の通りである。

読点……「，」（日本式の「、」に相当）

句点……「。」

並列区切り符号……「、」（日本式の「・」に相当）

書名・篇名……《　》（日本式の『　』「　」に相当）

引用の開始符号……「：」（日本式の「、」に相当）

・校勘は、大阪大学懐徳堂文庫所蔵中井履軒手稿本『大学雑議』との校合を行い、その結果を段落ごとに注記する。但し、『日本名家四書注釈全書』は刊本、懐徳堂文庫本は抄本であるため、いわゆる異体字の類は無数にある。ここでは、原則として、異体字については校勘の対象とせず、文意に相違が出てくる字句についてのみ、その異同を明記することとした。なお、刊本と抄本における異体字の例を、念のため以下に一括して掲げておく。これは、履軒の書き癖を知る手がかりにもなるであろう。

〈底本〉	〈履軒手稿本〉
蠶	蚕
萬	万

略　己　辶　規規　示　兒　教　曾　青　門　歸　亡　既　章　來　墨　斷　聽　燒　隨　喻

略　巳　辶（一点しんにょう）　規＝（重文符号）　ネ（しめすへん）　児　教　曽　青　門　帰　亾　既　章　来　墨　断　聴　焼　随　喻

齒　　歯

・校勘の書式は、概ね次のようにする。

①「※」字、履軒手稿本無。
（底本の文字が履軒手稿本にない場合）

②「※」字、履軒手稿本作「△」。
（底本と履軒手稿本とで文字が異なる場合）

③「※」字前、履軒手稿本有「◆◇」二字。
（底本にはない字句が履軒手稿本にある場合）

④此句履軒手稿本作「※◆◇」。
（底本の一句が履軒手稿本では異なる字句となっている場合）

⑤此句當作「※◆◇」。
（明らかな誤記と思われる場合）

【序・本文の標点・校合の結果】

刊大學雜議中庸論孟逢原序

吾先曾王父履軒先生之經業，有《七經雕題詳》、《略》、《七經逢原》。《逢原》壯歳所著，稾本塗竄，至不可讀。乃細寫在本經上頭，命名曰《雕題》。後三十年，又經刪改，行間下趾，不復留餘白。於是鈔錄《雕題》，得二十卷。《七經雕題略》是也。其詳者，欲別寫一通，

而厭其浩繁，乃所引宋明諸家說，悉削其氏號，會萃爲一家之言。遂復舊名曰《七經逢原》。合《大學雜議》，共三十二卷。斯書水哉館許受讀者，高足三人耳。懷德堂規，年踰四十，而通朱學者，獨得閱覽。是以坊間流布不多。其刊行于世者，以懷德堂記念會印《論語》爲始。屬者東京關儀一郎君設東洋圖書刊行會，刊《日本名家四書註釋全書》，請收《逢原》屬《四書》者。乃就《七經》中取《中庸》、《論語》、《孟子》及《大學雜議》而授之。若夫合《周易》、《古詩》、《尚書》、《左傳》，專刊《七經》，則余竊俟來日。

履軒先生著書，《雕題》以外不署名號。獨《逢原》則題「水哉館學」四字。今循其舊。

《逢原》据朱子《集註》而取舍，擧異而錯同。讀者參考而可。

大正壬戌夏五月水哉館後人中井天生成文甫敍。

大學雜議

古者有大學，而無小學。蓋大學者國學也。其他左學右學，東膠西膠，庠序之類猶多矣。國學其冠也。故與衆學比擬，而有大之名焉。此學之大小，而不在於人之大小也。夫衆學，其實皆小學也。然各自有名稱。而無特占小名者。天子之元子衆子，公卿大夫元士之適子，年十五皆入大學，則公卿大夫元士之衆子，不得入焉。中士下士之子，亦不得入焉。此等並宜入衆學。凡年十四以下，未必入學，以其幼穉也。且在家受保傅之訓，學文畫，誦古訓而已矣。其或隨兄長，附入衆學者，亦不可謂必無之。但無專敎小兒之學宮耳。

《漢藝文志》，有小學門。而其所載，皆《蒼頡》、《史籀》、《急就》諸篇，文畫之冊而已矣。無兼涉洒掃應對，凡弟子之職者。以其小兒所學，故稱小學耳。亦非學宮之謂。

班固曰：「古者八歲入小學。」此本于劉歆之書，而爲言也。亦泛稱就學文畫之處，爲小學耳。非謂實有小學宮也。然啓後世之謬說者，斯言云。

朱子序中，分疏大學小學，頗明備。然皆臆度之言。劉歆、班固之外，絕無左證。《戴記》、《管子》諸書，可以見矣。序乃言，其次第節目之詳如此。吾不知何謂也。

据序，十五入大學者，公卿以下，皆適子。又無中士以下。雖加以凡民之俊秀，其數不多也。八歲入小學者，王公以下，不論適庶，加以中士以下之子。又益之以庶人之子弟，其數甚多，則小學之數，非數十百倍於大學，弗能受也。又公卿以下之衆子，中士以下之子，十五以上，入于何學。序中未列此等制度，則其節目，亦未可謂詳矣。洒掃應對，雖十五以上，亦可學習者矣。何必小兒。

唐以降，科第盛矣。舉業以暗誦爲功，而暗誦又幼學爲妙。故習舉業者，其父兄必貪幼學之功矣。古之人非不教子，而何必規規汲汲於幼學之功哉。成童入學，亦足矣。小兒之啓智竅，古遲而今蚤。長老皆每言之。況三代之時，想應尤遲，其父兄之督責，亦必弗若後世之嚴急也。風習教導，皆有古今之異。臆度妄發之鏃，懼不能破的也。

孔氏之遺書，孔子之言，曾子之述，曾子之意，門人之記，並是臆度，絕無左證。篇中若無「曾子曰」三字，其必以爲皆曾子之筆也。設令更有子思曰三字，亦必以爲子思門人所記也。臆度之言，何所不至。

此篇體裁行文，究竟不脫於《戴記》之臭味，非《中庸》之倫也。程子之表章，元非良策。

子思《中庸》之前未有以誠字論道理工夫者，此篇有誠意，必是子思以後之書矣。《易傳》亦然。

此篇蓋成於一人之手矣。一篇中自相爲經緯者，《戴記》諸篇，其例不乏。此篇亦不當判經傳矣。古本實不可易，而其次序錯亂，則亦不可弗釐正焉。

按北魏《高佑傳》：「祐以郡國雖有大學，縣黨宜有黌序，乃縣立講學，黨立教學，村立小學。」所謂小學，是庠序之小者耳。非童學之謂。

北魏《儒林傳》云：「詔立國子大學四門小學。」又云：「詔營國學，樹小學於四門。」又：「劉蘭年三十餘，始入小學，書《急就篇》。」

大學　天樂樓章句

大學之道，在明明德，在新民，在止於至善。知止而后有定，定而后能靜，靜而后能安，安而后能慮，慮而后能得。《詩》云：「邦畿千里，惟❶民所止。」《詩》云：「緡蠻黃鳥，止于丘隅。」子曰：「於止，知其所止，可以人而不如鳥乎。」《詩》云：「穆穆文王，於緝熙敬止。」爲人君，止於仁。爲人臣，止於敬。爲人子，止於孝。爲人父，止於慈。與國人交，止於信。《詩》云：「瞻彼淇澳，菉竹猗猗。有斐

君子，如切如磋，如琢如磨。瑟兮僩兮，赫兮喧兮。有斐君子，終不可諠兮。」如切如磋者，謂學也。如琢如磨者，自脩也。瑟兮僩兮者，恂慄也。赫兮喧兮者，威儀也。有斐君子，終不可諠兮者，道盛德至善，民之不能忘也。《詩》云：「於戲前王不忘。」君子賢其賢而親其親，小人樂其樂而利其利，此以沒世不忘也。

右第一章

（校勘）❶「惟」字，履軒手稿本作「唯」。

《湯之盤銘》曰：「苟日新，日日新，又日新。」《康誥》曰：「作新民。」《詩》曰：「周雖舊邦，其命維新。」是故君子無所不用❶其極。

右第二章

（校勘）❶「不用」二字，履軒手稿本無。但欄外有「不用」二字。

《康誥》曰：「克明德。」《大甲》曰：「顧諟天之明命。」《帝典》曰：「克明峻德。」皆自明也。

右第三章

古之欲明明德於天下者，先治其國。欲治其國者，先齊其家。欲齊其家者，先脩其身。欲脩其身者，先正其心。欲正其心者，先誠其意。欲誠其意者，先致其知。致知在格物。

右第四章

物有本末，事有終始。知所先后，則近道矣。自天子以至於庶人，壹是皆以脩身爲本。其本亂，而末治者，否矣。其所厚者薄，而其所薄者厚，未之有也。此謂知本。子曰：「聽訟，吾猶人也。必也使無訟乎。」無情者，不得盡其辭。大畏民志。此謂知之至也。

右第五章

物格而后知至，知至而后意誠，意誠而后心正，心正而后身脩，身脩而后家齊，家齊而后國治，國治而后天下平。

右第六章

所謂誠其意者，毋自欺也。如惡惡臭，如好好色，此之謂不自慊，故君子，必愼其獨也。小人閒居爲不善，無所不至，見君子而后厭然，揜其不善，而著其善。人之視己，如見其肺肝然，則何益矣。此謂誠於中，形於外。故君子，必愼其獨也。曾子曰：「十目所視，十手所指，其嚴乎。」富潤屋，德潤身，心廣體胖。故君子必誠其意。

右第七章

所謂脩身，在正其心者，人有所忿懥，則不得其正。有所恐懼，則不得其正。有所好樂，則不得其正。有所憂患，則不得其正。心不在焉，視而不見，聽而不聞，食而不知其味。此謂脩身在正其心。

右第八章

所謂齊其家，在脩其身者，人之其所親愛而辟焉，之其所賤惡而辟焉，之其所畏敬而辟焉，之其所哀矜而辟焉，之其所敖惰而辟焉。故好而知其惡，惡而知其美者，天下鮮矣。故諺有之曰：「人莫知其子之惡，莫知其苗之碩。」此謂身不脩，不可以齊其家。

右第九章

所謂治國，必先齊其家者，其家不可教，而能教人者無之。故君子，不出家，而成教於國。孝者所以事君也。弟者所以事長也。慈者所以使衆也。《康誥》曰：「如保赤子。」心誠求之，雖不中不遠矣。未有學養子，而后嫁者也。一家仁，一國興仁，一家讓，一國興讓，一人貪戾，一國作亂。其機如此。此謂一言僨事，一人定國。堯舜帥天下以仁，而民從之。桀紂帥天下以暴，而民從之。其所令反其所好，而民

不從。是故君子，有諸己，而后求諸人，無諸己，而后非諸人。所藏乎身不恕，而能喻諸人者，未之有也。故治國在齊其家。《詩》云：「桃之夭夭，其葉蓁蓁。之子于歸，宜其家人。」宜其家人，而后可以教國人。《詩》云：「宜兄宜弟。」宜兄宜弟，而后可以教國人。《詩》云：「其儀不忒，正是四國。」其爲父子兄弟足法，而后民法之也。此謂治國在齊其家。

右第十章

所謂平天下，在治其國者，上老老，而民興孝，上長長，而民興弟，上恤孤，而民不倍。是以君子，有絜矩之道也。所惡於上，毋以使下。所惡於下，毋以事上。所惡於前，毋以先後。所惡於後，毋以從前。所惡於右，毋以交於左。所惡於左，毋以交於右。此之謂絜矩之道。《詩》云：「樂只君子，民之父母。」民之所好好之，民之所惡惡之，此之謂民之父母。《詩》云：「節彼南山，維石巖巖，赫赫師尹，民具爾瞻。」有國者，不可以不慎。辟則爲天下僇矣。《詩》云：「殷之未喪師，克配上帝。儀監于殷，峻命不易。」道得衆則得國，失衆則失國。是故君子，先慎乎德。有德此❶有人，有人此有土，有土此有財，有財此有用。德者本也，財者末也。外本内末，爭民施奪。是故財聚則民散，財散則民聚。是故言悖而出者，亦悖而入，貨悖而入者，亦悖而出。《康誥》曰：「惟命不于常。」道善則得之，不善則失之矣。《楚書》曰：「楚國無以爲寶，惟善以爲寶。」《舅犯》曰：「亡人無以爲寶，仁親以爲寶。」《秦誓》曰：「若有一个臣，斷斷兮無他技，其心休休焉，其如有容焉。人之有技，若己有之，人之彥聖，其心好之。不啻若自其口出，寔能容之，以能保我子孫，黎民尚亦有利哉。人之有技，媢疾以惡之，人之彥聖，而違之俾不通，寔不能容，以不能保我子孫，黎民亦曰殆哉。」惟❷仁人放流之，迸諸四夷，不與同中國。此謂唯仁人爲能愛人，能惡人。見賢而不能舉，舉而不能先，怠也。見不賢，而不能退，退而不能遠，過也。好人之所惡，惡人之所好，是謂拂人之性，菑必逮夫身。是故君子有大道，必忠信以得之，驕泰以失之。生財有大道，生之者衆，食之者寡，爲之者疾，用之者舒，則財恒足矣。仁者以財發身，不仁者以身發財。未有上好仁，而下不好義者也。未有好義，其事不終者也。未有府庫財，非其財者也。孟獻子曰：「畜馬乘，不察於雞豚。伐冰之家，不畜牛羊。百乘之家，不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣，寧有盜臣。」長國家，而務財用者，必自小人矣。使小人爲國家，菑害並至。雖有善者，亦無如之何矣。此謂國不以利爲利，以義爲利也。

右第十一章

（校勘）❶「此」字，履軒手稿本欄外有「此斯同義」四字。

❷「惟」字，履軒手稿本作「唯」。

【注釈の標点・校合の結果】

第一章

明明德。下文引書釋之。然唯徵其文字而已。未論其工夫。故其本意難的知焉。程子乃据此，以定其理氣復初之說矣。未知其果與此篇之義合否。但其與《論語》、《中庸》、《孟子》，則未吻合耳。抑程子推其說，以解《中庸》、《論語》。雖頗有牽强遷就，卒能濟其說矣。至于《孟子》，則不能誣焉。乃以《孟子》之言，爲不備矣。豈其然哉。

德者得也。脩之自有工夫。工夫既成，而有得於己。然後稱之爲德也。所謂明德者，蓋從其既明之後，稱言之耳。非明德者素自備於己之謂也。且雖堯之聖，亦非峻德素自備於己。又明之必有工夫。但不待敎戒，自能知德之宜脩。而脩之之方，亦不甚勞思慮。故名之爲生知也。脩之之功，亦不甚費力，而無勉彊之勞。故名之爲安行也。所謂克明峻德者，從堯能脩明之，而峻德既立之後，稱賛之也。若謂堯之生知安行，峻德素既備於己，聖人固無氣禀之拘，又何曾有人欲之蔽，則峻德不待更明之也。《尙書》之文，爲不通。

磋礪也。四者，皆治玉石之事，以一物而言。說詳于詩。

第二章

盤，是醻盤。朝朝所用，如沐浴。爲未切。

苟如字。不管其他之辭。

作新民，謂鼓舞作興其民而新之也。非自新之謂。

其命，謂上天福祐之命，非王者受命之謂。維新與舊邦對。言邦雖舊，而盛昌日增。是福祐之新也。

第三章

顧如字。謂畏憚天之威也。命猶令也。謂天之威命耳。非謂賦予之命。

引《康誥》、《帝典》，並釋上明字也。引大甲，釋下明字也。

此自明也，與下章明於天下相顧。彼此内外瞭然。文法可審。

第四章

明明德於天下，謂推己之明德，而施被於天下也。非謂使民各自明其德。

致知在格物，與上文少變例。蓋其工夫頗端的矣。

致知，謂求覓明智，使其來至爲我之有也。夫智之本源，固在于我也。然智未明，則明智無有於我也。及其智既明也，如自外來至者。故曰致也，至也。致字，究竟是招來取納之義。

格物，謂躬往踐其地，莅其事，執其勞也。譬欲知稼穡之理，必先執耒耜，親耕耘，然後其理可得而知也。若欲知音樂之理，必先親吹竽擊鐘，進退舞蹈也。乃厭其煩勞，徒在家讀譜按節，夢想於金石之諧和，鳳皇之來儀，終世弗可得已。學算之牙籌，學書之筆墨，皆然。故欲孝欲弟欲信者，弗親莅其事，而得焉哉。此知行並進之方也。若夫瞑搜妄索，徒費精神而已矣。

此篇格物，與易窮理，其義大不同。且夫窮理盡性者，稱賛聖人之極致也。豈可責之意未誠，心未正之初學哉。

凡此篇，文辭未粹美，讓於《中庸》數等矣。以意迎志，可也。勿泥文生硬解。

第五章

后後。義全同。似不必改者。然此篇連用后字，而不用後字。此不應特用後字。故試改正。

物有本末，使人擇乎本末先後也。豈以一味推極物理爲美哉。

物，承上章格物而言。

聽訟一節，薄斷格物致知之義也。夫使民無訟之理，何由而得之哉。若未嘗聽訟，則使無訟之理，茫乎無由知之矣。既嘗聽訟，斷曲直，

則民之情僞，我已知之矣。則使無訟之事，亦可得而爲也。聽訟格物也。能使無訟，是知之至也。

知之至者，明智來聚，爲我之有也。知至，特以一事而言，未論貫通。

第六章

此章漸開說。物格而後知至，謂事事踐履，而明智益生焉。非特指一事。上章指一事者，是比喩之故也。此則不同焉。此謂知本之衍文，從舊說削之。

補傳尤可怪者，在於以窮理至極，豁然貫通，無不明，爲初學工夫也。意未誠心未正之初學小子，而使之求聖人之極功，豈非躐等之甚乎哉。

卽凡天下之物，亦大泛。失古人急先務之義，且先知而後行。恐難以爲始教。已知之理句，與始教句礙。全體大用，亦非佳語。

天下事物之理，與我無干涉者，不必講求也。知之無益，不知無損，何必勞思費功之爲。唯我之所以應物之方，則不可弗知也。五穀樹藝，蠶桑紵麻，五母鷄，二母彘，數罟不入。斧斤以時，棟宇禦風雨，弧矢威暴亂，馬則羈首，牛則穴鼻，皆明其理以應之。古聖賢之道也。燒埴鎔金，雖我隨物理而應之，而物理反隨應而存焉。若夫蠶何由而吐絲，麻何由而生縷，鷄豚何以養人，酒醴何以醉人。魚所以游泳，禽所以飛翔，皆置而弗論也。禽則矰之，魚則釣之而已矣。何曾其理之問。是理也者，在我之應，而不在物矣。

譬如治曆。推日星之運行，得所以成晦朔冬夏之數，則已矣。若日月所以照，霜露所以隊之理，則勿問已。

禹之治水也，辨山川之險易，審水勢之順逆，而利導之而已矣。非辨水性，審水味，若後世茶人也。

醫之辨草木，取其充藥籠者而已矣。其他野草山木，勿省也。如今時本草家者流，則固矣。

古聖賢之於物，適用之外，無論其理也。若以一人之心百年之功，而欲推窮萬事萬物之理，其亦難矣。聖賢必不其然焉。

衆物之表裏精粗，無不到。而吾心之全體大用，無不明。此豈小可之事也哉。然仍居於正心誠意之前，是次序尤不可曉。

第七章

所謂八條目，此以下相解釋者，唯六條矣。如致知在格物，本文意自明備，無別用解釋，且前文亦略指其旨趣矣。故以此章爲六條目解

釋之首也。致格行文已不同，而此以所謂誠其意特起矣。不與下章同，文勢可按。

譬如財貨，人固知取之之爲不義也。而貪心不能自禁，乃遷就作說，竟鍛錬作取之爲義。然後取之，其心則安焉。自不生慚愧，是之謂自欺也。以此掩人，使人❶誚己（誚上疑脫不字崑山先生手寫本）。是之謂欺人也。凡爭產者之以辱祖爲言，肆淫者之以求嗣爲言，皆是物也。事無大小，皆一類。

欺字，元謂詐人也。乃轉作欺己者。自字，與自刑自殺之自同。

人之言動，內外無間。如惡惡臭，如好好色，斯可也。惡惡臭，好好色，是比喩，曉其內外無間而已。不當因作好善惡惡解。

不自慊，舊脫不字，今試補之。慊訛作謙，從舊論改正。

慊是欠缺不滿之意。不慊，是圓滿快足之義。

毋者，自禁止之意，非自此禁彼之謂。

有憂者，必有愁容。有喜者，必有歡容。旁人或怪而問焉。誠中形外，理正如此。古詩有之，曰：「物や思ふと人のとふまで。」

心廣則體胖。此與德潤身，文不對，而意同。

體，謂手足。

是章特起，不當連格致作解。

（校勘）❶「誚」之上，疑脫「不」字。

第八章

首句宜言，所謂欲脩其身者，先正其心也。今酌其意，而變其文。雖義無異者，而所謂兩字無落着，頗失文辭之規。蓋筆者之粗鹵云。下章並放此。

人有所忿懥，人字，舊訛作身。今試改正。

人字，與下章一例。言人有怒，則心不得❶正也。是句不出心字。然連上下文讀之，無所迷。程子欲改身作心，有未圓。❷其字指心。

通人之情，不論喜怒憂樂。厪有一物横于胸中，心則失其正。當是時，其應事接物，必有不當怒而怒，當喜而不喜。七情皆失其平也。然所謂不得其正者，指心上之偏頗也。未論發處之失平。下節心不在焉以下，乃以發處驗之也。

心不在焉，卽放心也。放心又生於心之偏頗者。

此章，唯擧不正之害，使人自擇焉。註家或欲以敬直爲其工夫，文外生義，不可從。六條目，自然相連屬已。非是章特有承上起下之義。

（校勘）❶「得」字之下，履軒手稿本有「其」字。

❷「圓」字之下，履軒手稿本有空格。

第九章

之適也。猶向也。不當訓於。辟，僻之本字。

曰故諺有之❶，分明申上文之意。不當以上下文分屬脩身齊家。

八章九章，唯擧其僻與不正，使人自擇焉，則於正心脩身工夫，不亦濶乎。蓋筆者於此等，未有所得，略擇好語，安排敷陳而已矣。至于十章以下，乃其本領矣。故其言之詳焉。

昔人誚此篇，以龍頭蛇尾，似無所差，而未得其肯綮矣。蓋蛇尾乃筆者之實得，龍頭乃筆者之虛想。

（校勘）❶此句當作「故諺有之曰」。

第十章

此章，不當挾脩身作解。

堯舜數句，主意在下，非承上文。

令反與不恕，亦稍不同，不得混說。

第十一章

老老長長恤孤，卽是政事矣。老長孤，皆在國中者，非國君家中之人，與上章孝弟慈不同。彼論齊家，此論治國，彼言慈幼，此言恤孤，文義自分明。如國君家中，恤孤兩字，無所用。

古者上有養老之禮，尙齒之儀，施及鄉閭。文王施仁政，以矜寡孤獨爲先。漢代，老者給粥賜帛，煢孤皆有恤典。

不倍，謂民德歸厚，不相棄偝也。

絜挈通，謂提矩度上下之長短也。前後左右皆然。但非取方正之義。

矩已比喩矣。長短亦比喩。凡禮之厚薄輕重，情之疏密大小，皆是。

有絜矩之道，是題目而假說。所惡毋施以下，是工夫之實說，非覆解上文之謂。

六箇毋字，與毋自欺之毋同。是自禁之辭，在絜矩者心上也。非禁人者，絜矩之義。

止于道字，下節以下，與絜矩無干涉，不當挾焉以作說。

民之父母，專稱其愛民之切至也。未言及乎民之愛戴焉。

辟，僻之本字。但徇己之欲。故陷于邪僻耳。不當顚倒先後。

配，合也。謂德與上帝合。引詩，各發其意也。無結上文之意。

愼乎德，唯論其行實也。何必擧明德。

財散，何必論有德。此等語元淺近，不當强求深解。

悖音勃。梁武帝嫌其音近佛，而改焉。不可遵用。

《楚書》，惟是楚國之典籍矣。此二句，蓋其全文，非節取《國語》。

斷斷，木之斬斷無枝之貌，以喩人之無技藝也。非誠一之謂。

寔能容之一句，括上數句，而入于下句。此不屬于上句。下文不能容句，放此。

上文言，如有容。猶是揣量，未得實際之辭。此言寔能容，以此爲實際，而論其功效也。

能保我子孫爲句，利字特以黎民而言。

娟妬也。疾嫉之本字。

迸如字自通，不必作屏。水之濫溢，亦謂之迸。卽是外放之義。

驕泰兩字，正是恭一字之反對矣。古語忠信兩字，大抵後世一誠字足承當。

一章之內所稱述，大抵同類者，累累重言之。元無意於先後次序，亦無相解釋之意。不當拘攣作說，妄生枝蔓。

生之食之，指米粟也。爲之用之，指布帛也。財恆足，合兩者而言。

國無遊民，則生者衆，卽是食者寡矣。不當別論無幸位。但食祿者，受廩者，亦宜隨國之廣狹，爲之節制矣。不當失多寡之準耳。亦與幸位異科。

財足，與財聚異科。不當牽合作說。

終者成就之義。《大甲》曰：「克終允德。」

民者君之府庫也。財積于民間，卽是君之財矣。不當以比喻作實說。

獻子之語，專以富而言，非論位次。不當以位次作解。

馬鷄氷豚，大小相照而已。馬乘不論士大夫，畜馬者卽是。士有上下，上士固得乘車矣。乘車必畜馬，不俟試大夫。

百乘，是方百里之賦，采地之大者，非周制。獻子亦百乘矣。

盜臣之下，舊有此謂國不以利爲利，以義爲利也十三字。蓋衍文。今試削。

使小人，舊訛舛，作彼爲善之小人之使。今試改削。

大學雜議終

三　朱子『大学章句集注』の立場

以上、「儒蔵」編纂事業に基づいて、標点・校勘を付した『大学雑議』の序・本文・注釈の全体を提示してきた。

それでは、こうした作業から、『大学雑議』の思想史的位置はどのように理解されるであろうか。実は、『大学雑議』の思想史的位置という問題については、すでに、『江戸の儒学　『大学』受容の歴史』（源了圓編、思文閣出版、一九八八年）所収の田尻祐一郎「懐徳堂学派―五井蘭洲と中井履軒」が考察を加えている。本稿の見解も、この田尻氏の結論を大きく越えるものではない。ただ、右の作業から得られた結果に基づいて、いくつか具体的な補足ができるであろう。

そこで、この問題を考える際の大前提として、江戸時代の儒学者たちが必読としていた朱子『大学章句集注』の思想史的位置を確認しておきたい。

『大学』は、もともと『礼記』中の一篇として漢代以降通行してきた。「五経」の一つ『礼記』は儒教の基礎的文献として尊重されてきたが、魏晋時代以降、道教や仏教の台頭もあり、儒教そのものが思想的活力を徐々に失っていった。そうした中、儒教の大胆な改編を企図したのが、南宋の朱子である。朱子は、それまでの「五経」に代わり、『孟子』『論語』、および『礼記』中から「大学」「中庸」各篇を独立させ、併せて「四書」として顕彰した。孔孟の意を直接記したのが、この「四書」であると考えたからである。

但し、「四書」として再編するに際し、従来のテキストにかなりの改変が加えられた。『大学』について言えば、冒頭部は『礼記』大学篇を継承している。だが、朱子は、全体を冒頭部の「経」とそれを解説した「伝」とに分ける。そして、『大学』全体は、経の「格物致知」「誠意」「正心」「修身」「斉家」「治国」「平天下」の、いわゆる八条目を、伝が順に解説していくという構造で理解したのである。但し、伝の第五章には原文に欠落があるとして、文言を大幅に加筆した。これが朱子『章句』の基本姿勢である。

このことを視覚的に明らかにするために、図1に、対照表を掲げてみよう。上段が『礼記』大学篇、下段が朱子『大学章句』である。上段から下段にのびる矢印は、大学篇の各要素が、『章句』においてどのように再構成されたかを示すものである。

図1 『礼記』大学篇・朱子『大学章句集注』対照表

『礼記』大学篇

大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得。物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣。

古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知、致知在格物。

物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身脩而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平。

自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本。其本亂而末治者否矣。其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。

此謂知本、此謂知之至也。

所謂誠其意者、毋自欺也、如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙、故君子必慎其獨也。

小人閒居爲不善、無所不至、見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必慎其獨也。

曾子曰、「十目所視、十手所指、其嚴乎」。富潤屋、德潤身、心廣體胖、故君子必誠其意。

朱子『大学章句集注』

經

大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得。物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣。

古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身脩而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平。

自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本。其本亂而末治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。

伝第一章

康誥曰、「克明德」。大甲曰、「顧諟天之明命」。帝典曰、「克明峻德」。皆自明也。

伝第二章

湯之盤銘曰、「苟日新、日日新、又日新」。康誥曰、「作新民」。詩曰、「周雖舊邦、其命惟新」。是故君子無所不用其極。

伝第三章

詩云、「瞻彼淇澳、菉竹猗猗。有斐君子、如切如磋、如琢如磨。瑟兮僩兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮」。「如切如磋」者、道學也。「如琢如磨」者、自脩也。「瑟兮諠兮」者、恂慄也。「赫兮喧兮」者、威儀也。「有斐君子、終不可諠兮」者、道盛德至善、民之不能忘也。

詩云、「於戲前王不忘」。君子賢其賢而親其親、小人樂其樂而利其利、此以沒世不忘也。

康誥曰、「克明德」。太甲曰、「顧諟天之明命」。帝典曰、「克明峻德」。皆自明也。

湯之盤銘曰、「苟日新、日日新、又日新」。康誥曰、「作新民」。詩曰、「周雖舊邦、其命惟新」。是故君子無所不用其極。

詩云、「邦畿千里、惟民所止」。詩云、「緡蠻黄鳥、止于丘隅」。子曰、「於止、知其所止、可以人而不如鳥乎」。詩云、「穆穆文王、於緝熙敬止」。爲人君止於仁。爲人臣止於敬。爲人子止於孝。爲人父止於慈。與國人交止於信。

子曰、「聽訟、吾猶人也、必也使無訟乎」。無情者不得盡其辭、大畏民志。此謂知本。

詩云、「邦畿千里、惟民所止」。詩云、「緡蠻黄鳥、止于丘隅」。子曰、「於止、知其所止、可以人而不如鳥乎」。詩云、「穆穆文王、於緝熙敬止」。爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國人交、止於信。

詩云、「瞻彼淇澳、菉竹猗猗。有斐君子、如切如磋、如琢如磨。瑟兮僩兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮」。如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自脩也。瑟兮僩兮者、恂慄也。赫兮喧兮者、威儀也。有斐君子、終不可諠兮者、道盛德至善、民之不能忘也。詩云、「於戲前王不忘」。君子賢其賢而親其親、小人樂其樂而利其利、此以沒世不忘也。

伝第四章

子曰、「聽訟、吾猶人也、必也使無訟乎」。無情者不得盡其辭。大畏民志、此謂知本。

伝第五章

此謂知本、此謂知之至也。

所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也。蓋人心之靈莫不有知、而天下之物莫不有理、惟於理有未窮、故其知有不盡也。是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。

所謂脩身在正其心者、身有所忿懥、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正。心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。此謂脩身在正其心。

所謂齊其家在脩其身者、人之其所親愛而辟焉、之其所賤惡而辟焉、之其所畏敬而辟焉、之其所哀矜而辟焉、之其所敖惰而辟焉。故好而知其惡、惡而知其美者、天下鮮矣。故諺有之曰、「人莫知其子之惡、莫知其苗之碩」。此謂身不脩不可以齊其家。

所謂治國必先齊其家者、其家不可教、而能教人者、無之。故君子不出家、而成教於國。孝者、所以事君也。弟者、所以事長也。慈者、所以使衆也。康誥曰、「如保赤子」、心誠求之、雖不中不遠矣。未有學養子而後嫁者也。

一家仁、一國興仁。一家讓、一國興讓。一人貪戾、一國作亂。其機如此。此謂一言僨事、一人定國。

堯舜率天下以仁、而民從之。桀紂率天下以暴、而民從之。其所令反其所好、而民不從。是故君子有諸己而后求諸人、無諸己而后非諸人。所藏乎身不恕、而能喻諸人者、未之有也。故治國在齊其家。

詩云、「桃之夭夭、其葉蓁蓁。之子于歸、宜其家人」。宜其家人、而后可以教國人。

詩云、「宜兄宜弟」。宜兄宜弟、而后可以教國人。

詩云、「其儀不忒、正是四國」。其爲父子兄弟足法、而后民法之

伝第六章

所謂誠其意者、毋自欺也、如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙、故君子必慎其獨也。

小人閒居爲不善、無所不至、見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必慎其獨也。

曾子曰、「十目所視、十手所指、其嚴乎」。富潤屋、德潤身、心廣體胖、故君子必誠其意。

伝第七章

所謂脩身在正其心者、身有所忿懥、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正。心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。此謂脩身在正其心。

伝第八章

所謂齊其家在脩其身者、人之其所親愛而辟焉、之其所賤惡而辟焉、之其所畏敬而辟焉、之其所哀矜而辟焉、之其所敖惰而辟焉。故好而知其惡、惡而知其美者、天下鮮矣。故諺有之曰、「人莫知其子之惡、莫知其苗之碩」。此謂身不脩不可以齊其家。

伝第九章

所謂治國必先齊其家者、其家不可教而能教人者、無之。故君子不出家而成教於國、孝者、所以事君也。弟者、所以事長也。慈者、所以使衆也。康誥曰「如保赤子」、心誠求之、雖不中不遠矣。未有學養

也。此謂治國在齊其家。

所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不倍、是以君子有絜矩之道也。所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。所惡於前、毋以先後。所惡於後、毋以從前。所惡於右、毋以交於左。所惡於左、毋以交於右。此之謂絜矩之道。

詩云、「樂只君子、民之父母」。民之所好好之、民之所惡惡之、此之謂民之父母。

詩云、「節彼南山、維石巖巖。赫赫師尹、民具爾瞻」。有國者不可以不慎、辟則爲天下僇矣。

詩云、「殷之未喪師、克配上帝。儀監于殷、峻命不易」。道得衆則得國、失衆則失國。

是故君子先慎乎德。有德此有人、有人此有土、有土此有財、有財此有用。德者本也、財者末也。外本内末、争民施奪。是故財聚則民散、財散則民聚。是故言悖而出者、亦悖而入。貨悖而入者、亦悖而出。

康誥曰、「惟命不于常」。道善則得之、不善則失之矣。

楚書曰、「楚國無以爲寶、惟善以爲寶」。

舅犯曰、「亡人無以爲寶、仁親以爲寶」。

秦誓曰、「若有一介臣、斷斷兮無他技、其心休休焉、其如有容焉。人之有技、若己有之。人之彦聖、其心好之、不啻若自其口出。寔能容之、以能保我子孫黎民、尚亦有利哉。人之有技、媢嫉以惡之。人之彦聖、而違之俾不通。寔不能容、以不能保我子孫黎民、亦曰殆哉」。

子而后嫁者也。

一家仁、一國興仁。一家讓、一國興讓。一人貪戾、一國作亂。其機如此。此謂一言僨事、一人定國。

堯舜帥天下以仁、而民從之。桀紂帥天下以暴、而民從之。其所令反其所好、而民不從。是故君子有諸己而后求諸人、無諸己而后非諸人。所藏乎身不恕、而能喻諸人者、未之有也。故治國在齊其家。

詩云、「桃之夭夭、其葉蓁蓁。之子于歸、宜其家人」。宜其家人、而后可以教國人。

詩云、「宜兄宜弟」。宜兄宜弟、而后可以教國人。

詩云、「其儀不忒、正是四國」。其爲父子兄弟足法、而后民法之也。此謂治國在齊其家。

伝第十章

所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不倍、是以君子有絜矩之道也。所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。所惡於前、毋以先後。所惡於後、毋以從前。所惡於右、毋以交於左。所惡於左、毋以交於右、此之謂絜矩之道。

詩云、「樂只君子、民之父母」。民之所好好之、民之所惡惡之、此之謂民之父母。

詩云、「節彼南山、維石巖巖、赫赫師尹、民具爾瞻」。有國者不可以不慎、辟則爲天下僇矣。

詩云、「殷之未喪師、克配上帝。儀監于殷、峻命不易」。道得衆則得國、失衆則失國。

是故君子先慎乎德。有德此有人、有人此有土、有土此有財、有財此有用。德者本也、財者末也、外本内末、争民施奪。是故財聚則民散、

唯仁人放流之、迸諸四夷、不與同中國、此謂唯仁人爲能愛人、能惡人。

見賢而不能舉、舉而不能先、命也。見不善而不能退、退而不能遠、過也。好人之所惡、惡人之所好、是謂拂人之性、菑必逮夫身。

是故君子有大道、必忠信以得之、驕泰以失之。

生財有大道。生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒、則財恒足矣。仁者以財發身、不仁者以身發財。未有上好仁而下不好義者也、未有好義其事不終者也、未有府庫財非其財者也。

孟獻子曰、「畜馬乘、不察於雞豚。伐冰之家、不畜牛羊。百乘之家、不畜聚斂之臣。與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。此謂國不以利爲利、以義爲利也。長國家而務財用者、必自小人矣。彼爲善之、小人之使爲國家、菑害並至。雖有善者、亦無如之何矣。此謂國不以利爲利、以義爲利也。

財散則民聚。是故言悖而出者、亦悖而入。貨悖而入者、亦悖而出。

康誥曰、「惟命不于常」。道善則得之、不善則失之矣。

楚書曰、「楚國無以爲寶、惟善以爲寶」。

舅犯曰、「亡人無以爲寶、仁親以爲寶」。

秦誓曰、「若有一个臣、斷斷兮無他技、其心休休焉、其如有容焉。人之有技、若己有之、人之彥聖、其心好之、不啻若自其口出、寔能容之、以能保我子孫黎民、尚亦有利哉。人之有技、媢疾以惡之、人之彥聖、而違之俾不通、寔不能容、以不能保我子孫黎民、亦曰殆哉」。唯仁人放流之、迸諸四夷、不與同中國。此謂唯仁人爲能愛人、能惡人。

見賢而不能舉、舉而不能先、命也。見不善而不能退、退而不能遠、過也。好人之所惡、惡人之所好、是謂拂人之性、菑必逮夫身。

是故君子有大道、必忠信以得之、驕泰以失之。

生財有大道。生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒、則財恒足矣。仁者以財發身、不仁者以身發財。未有上好仁而下不好義者也、未有好義其事不終者也、未有府庫財非其財者也。

孟獻子曰、「畜馬乘不察於雞豚、伐冰之家不畜牛羊、百乘之家不畜聚斂之臣、與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。此謂國不以利爲利、以義爲利也。長國家而務財用者、必自小人矣。彼爲善之、小人之使爲國家、菑害並至。雖有善者、亦無如之何矣。此謂國不以利爲利、以義爲利也。

四　中井履軒『大学雑議』の立場

次に、いよいよ中井履軒『大学雑議』の立場を検討してみよう。これは、懐徳堂学派が朱子学をどのように受容したか、という問題にも関わってくる。

まず、大枠として言えることは、履軒の『大学雑議』が朱子の『大学章句』をかなり大幅に改訂しているということである。では、履軒は、朱子『章句』を棄てて、『礼記』大学篇への回帰を目指したのであろうか。いや、決してそうではない。あくまで朱子『章句』を基本とした上での修訂である。

具体的には、右の作業結果に明らかなように、朱子『章句』の大枠である「経」「伝」の区分を履軒は採用していない。改めて、『大学』全体を全十一章に再構成している。

次に、朱子『章句』の伝第四章末尾・第五章冒頭の「此謂知本」四字は重複であるとして削除している。

また、大きな相違点として、朱子『章句』の伝第五章相当部分があげられる。朱子が伝第五章として大量に補筆した部分を、履軒は全く採用せず、すべて削除している。「補傳尤可怪者」と手厳しい。さらに、朱子『章句』の伝第十章の一部にも衍文があるとして改訂・削除を施している。

このように、履軒は、朱子『章句』に基づきながらも、朱子の示した「経」「伝」という大枠自体を全く採用せず、独自の再編を試みている。この点を明らかにするために、図2に対照表を掲げてみよう。上段が朱子『章句』、下段が履軒『大学雑議』である。図1同様、上段から下段に向かってのびる矢印は、『章句』の各要素が、『大学雑議』においてどのように再構成されたかを示すものである。

図2　朱子『大学章句集注』・中井履軒『大学雑議』対照表

朱子『大学章句集注』	中井履軒『大学雑議』
經 大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得。	第一章 大學之道、在明明德、在新民、在止於至善。知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得。
物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣。	詩云、「邦畿千里、惟民所止」。詩云、「緡蠻黄鳥、止于丘隅」。子曰、「於止、知其所止、可以人而不如鳥乎」。詩云、「穆穆文王、於緝熙敬止」。為人君、止於仁。為人臣、止於敬。為人子、止於孝。為人父、止於慈。與國人交、止於信。詩云、「瞻彼淇澳、菉竹猗猗。有斐君子、如切如磋、如琢如磨。瑟兮僩兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮」。如切如磋者、謂學也。如琢如磨者、自脩也。瑟兮僩兮者、恂慄也。赫兮喧兮者、威儀也。有斐君子、終不可諠兮者、道盛德至善、民之不能忘也。詩云、「於戲前王不忘」。君子賢其賢而親其親、小人樂其樂而利其利、此以沒世不忘也。
古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。	第二章 湯之盤銘曰、「苟日新、日日新、又日新」。康誥曰、「作新民」。詩曰、「周雖舊邦、其命維新」。是故君子無所不用其極。
物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身脩而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平。	第三章 康誥曰、「克明德」。大甲曰、「顧諟天之明命」。帝典曰、「克明
自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本。其本亂而末治者否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。	
伝第一章 康誥曰、「克明德」。大甲曰、「顧諟天之明命」。帝典曰、「克明峻德」。皆自明也。	
伝第二章	

湯之盤銘曰、「苟日新、日日新、又日新」。康誥曰、「作新民」。詩曰、「周雖舊邦、其命惟新」。是故君子無所不用其極。

伝第三章

詩云、「邦畿千里、惟民所止」。詩云、「緡蠻黄鳥、止于丘隅」。子曰、「於止、知其所止、可以人而不如鳥乎」。詩云、「穆穆文王、於緝熙敬止」。爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國人交、止於信。詩云、「瞻彼淇澳、菉竹猗猗。有斐君子、如切如磋、如琢如磨。瑟兮僩兮、赫兮喧兮。有斐君子、終不可諠兮」。如切如磋者、道學也。如琢如磨者、自脩也。瑟兮僩兮者、恂慄也。赫兮喧兮者、威儀也。有斐君子、終不可諠兮者、道盛德至善、民之不能忘也。詩云、「於戲前王不忘」。君子賢其賢而親其親、小人樂其樂而利其利、此以沒世不忘也。

伝第四章

子曰、「聽訟、吾猶人也、必也使無訟乎」。無情者不得盡其辭。大畏民志、

此謂知本。

伝第五章

此謂知本、

此謂知之至也。

峻德」。皆自明也。

第四章

古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。

第五章

物有本末、事有終始、知所先后、則近道矣。

自天子以至於庶人、壹是皆以脩身為本。其本亂、而末治者、否矣、其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。

此謂知本。

子曰、「聽訟、吾猶人也、必也使無訟乎」。無情者不得盡其辭。大畏民志。

此謂知之至也。

第六章

物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身脩而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平。

第七章

所謂致知在格物者、言欲致吾之知、在即物而窮其理也。蓋人心之靈莫不有知、而天下之物莫不有理、惟於理有未窮、故其知有不盡也。是以大學始教、必使學者即凡天下之物、莫不因其已知之理而益窮之、以求至乎其極。至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。此謂物格、此謂知之至也。

伝第六章

所謂誠其意者、毋自欺也、如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙、故君子必慎其獨也。

小人閒居爲不善、無所不至、見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必慎其獨也。

曾子曰、「十目所視、十手所指、其嚴乎」。富潤屋、德潤身、心廣體胖、故君子必誠其意。

伝第七章

所謂脩身在正其心者、身有所忿懥、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正。心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。此謂脩身在正其心。

伝第八章

所謂齊其家在脩其身者、人之其所親愛而辟焉、之其所賤惡而辟焉、之其所畏敬而辟焉、之其所哀矜而辟焉、之其所敖惰而辟焉。故好而知其惡、惡而知其美者、天下鮮矣。

故諺有之曰、「人莫知其子之惡、莫知其苗之碩」。此謂身不脩不可以

所謂誠其意者、毋自欺也、如惡惡臭、如好好色、此之謂不自謙、故君子必慎其獨也。

小人閒居為不善、無所不至、見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必慎其獨也。

曾子曰、「十目所視、十手所指、其嚴乎」。富潤屋、德潤身、心廣體胖、故君子必誠其意。

第八章

所謂脩身、在正其心者、人有所忿懥、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正。心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。此謂脩身在正其心。

第九章

所謂齊其家、在脩其身者、人之其所親愛而辟焉、之其所賤惡而辟焉、之其所畏敬而辟焉、之其所哀矜而辟焉、之其所敖惰而辟焉。故好而知其惡、惡而知其美者、天下鮮矣。

故諺有之曰、「人莫知其子之惡、莫知其苗之碩」。此謂身不脩不可以齊其家。

第十章

所謂治國、必先齊其家者、其家不可教、而能教人者無之。故君子、不出家、而成教於國、孝者所以事君也。弟者所以事長也。慈者所以使衆也。康誥曰「如保赤子」、心誠求之、雖不中不遠矣。

齊其家。

伝第九章

所謂治國必先齊其家者、其家不可教而能教人者、無之。故君子不出家而成教於國、孝者、所以事君也。弟者、所以事長也。慈者、所以使衆也。康誥曰「如保赤子」、心誠求之、雖不中不遠矣。未有學養子而后嫁者也。

一家仁、一國興仁。一家讓、一國興讓。一人貪戾、一國作亂。其機如此。此謂一言僨事、一人定國。

堯舜帥天下以仁、而民從之。桀紂帥天下以暴、而民從之。其所令反其所好、而民不從。是故君子有諸己而后求諸人、無諸己而后非諸人。所藏乎身不恕、而能喻諸人者、未之有也。故治國在齊其家。

詩云、「桃之夭夭、其葉蓁蓁。之子于歸、宜其家人」。宜其家人、而后可以教國人。詩云、「宜兄宜弟」。宜兄宜弟、而后可以教國人。詩云、「其儀不忒、正是四國」。其爲父子兄弟足法、而后民法之也。此謂治國在齊其家。

伝第十章

所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤而民不倍、是以君子有絜矩之道也。所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。所惡於前、毋以先後。所惡於後、毋以從前。所惡於右、毋以交於左。所惡於左、毋以交於右、此之謂絜矩之道。

詩云、「樂只君子、民之父母」。民之所好好之、民之所惡惡之、此之謂民之父母。

詩云、「節彼南山、維石巖巖、赫赫師尹、民具爾瞻」。有國者不可以

未有學養子、而后嫁者也。

一家仁、一國興仁。一家讓、一國興讓。一人貪戾、一國作亂。其機如此。此謂一言僨事、一人定國。

堯舜帥天下以仁、而民從之。桀紂帥天下以暴、而民從之。其所令反其所好、而民不從。是故君子、有諸己、而后求諸人、無諸己、而后非諸人。所藏乎身不恕、而能喻諸人者、未之有也。故治國在齊其家。

詩云、「桃之夭夭、其葉蓁蓁。之子于歸、宜其家人」。宜其家人、而后可以教國人。詩云、「宜兄宜弟」。宜兄宜弟、而后可以教國人。詩云、「其儀不忒、正是四國」。其為父子兄弟足法、而后民法之也。此謂治國在齊其家。

第十一章

所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟、上恤孤、而民不倍、是以君子、有絜矩之道也。

所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。所惡於前、毋以先後。所惡於後、毋以從前。所惡於右、毋以交於左。所惡於左、毋以交於右、此之謂絜矩之道。

詩云、「樂只君子、民之父母」。民之所好好之、民之所惡惡之、此之謂民之父母。

詩云、「節彼南山、維石巖巖、赫赫師尹、民具爾瞻」。有國者不可以不愼、辟則為天下僇矣。

詩云、「殷之未喪師、克配上帝。儀監于殷、峻命不易」。道得衆則得國、失衆則失國。

是故君子先愼乎德。有德此有人、有人此有土、有土此有財、有

不慎、辟則爲天下僇矣。
詩云、「殷之未喪師、克配上帝。儀監于殷、峻命不易」。道得衆則得國、失衆則失國。
是故君子先慎乎德。有德此有人、有人此有土、有土此有財、有財此有用。德者本也、財者末也、外本内末、争民施奪。是故財聚則民散、財散則民聚。是故言悖而出者、亦悖而入。貨悖而入者、亦悖而出。
康誥曰、「惟命不于常」。道善則得之、不善則失之矣。
楚書曰、「楚國無以爲寶、惟善以爲寶」。
舅犯曰、「亡人無以爲寶、仁親以爲寶」。
秦誓曰、「若有一个臣、斷斷兮無他技、其心休休焉、其如有容焉。人之有技、若己有之、人之彦聖、其心好之、不啻若自其口出、寔能容之、以能保我子孫黎民、尚亦有利哉。人之有技、媢疾以惡之、人之彦聖、而違之俾不通、寔不能容、以不能保我子孫黎民、亦曰殆哉」。
唯仁人放流之、迸諸四夷、不與同中國。此謂唯仁人爲能愛人、能惡人。
見賢而不能舉、舉而不能先、命也。見不善而不能退、退而不能遠、過也。好人之所惡、惡人之所好、是謂拂人之性、菑必逮夫身。
是故君子有大道、必忠信以得之、驕泰以失之。
生財有大道。生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒、則財恒足矣。仁者以財發身、不仁者以身發財。未有上好仁而下不好義者也、未有好義其事不終者也、未有府庫財非其財者也。
孟獻子曰、「畜馬乘不察於雞豚、伐冰之家不畜牛羊、百乘之家不畜聚斂之臣、與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。此謂國不以利爲利、以義爲利也。長國家而務財用者、必自小人矣。彼爲善之、小人之使爲國家、菑害並至。雖有善者、亦無如之何矣。此謂國不以利爲利、以義爲利也。

財此有用。德者本也、財者末也、外本内末、爭民施奪。是故財聚則民散、財散則民聚。是故言悖而出者、亦悖而入。貨悖而入者、亦悖而出。
康誥曰、「惟命不于常」。道善則得之、不善則失之矣。
楚書曰、「楚國無以為寶、惟善以為寶」。
舅犯曰、「亡人無以為寶、仁親以為寶」。
秦誓曰、「若有一个臣、斷斷兮無他技、其心休休焉、其如有容焉。人之有技、若己有之、人之彦聖、其心好之、不啻若自其口出、寔能容之、以能保我子孫黎民、尚亦有利哉。人之有技、媢疾以惡之、人之彦聖、而違之俾不通、寔不能容、以不能保我子孫、黎民亦曰殆哉」。
唯仁人放流之、迸諸四夷、不與同中國。此謂唯仁人為能愛人、能惡人。
見賢而不能舉、舉而不能先、怠也。見不賢而不能退、退而不能遠、過也。好人之所惡、惡人之所好、是謂拂人之性、菑必逮夫身。
是故君子有大道、必忠信以得之、驕泰以失之。
生財有大道、生之者衆、食之者寡、為之者疾、用之者舒、則財恒足矣。仁者以財發身、不仁者以身發財。未有上好仁而下不好義者也、未有好義其事不終者也、未有府庫財非其財者也。
孟獻子曰、「畜馬乘、不察於雞豚、伐冰之家、不畜牛羊、百乘之家、不畜聚斂之臣、與其有聚斂之臣、寧有盜臣」。長國家而務財用者、必自小人矣。使小人為國家、菑害並至。雖有善者、亦無如之何矣。此謂國不以利為利、以義為利也。

この表から、履軒が朱子『章句』を大胆に改編している様子が視覚的にも了解されよう。この結果を踏まえて、履軒『大学雑議』の思想史的位置に言及してみよう。これは、他の『大学』注釈書との相対的関係を明らかにすることにも繋がる。

その作業については、『大学』に関する膨大な注釈書との比較が必要になるが、ここでは、とりあえず、『大学雑議』とともに『日本名家四書注釈全書』に収録された諸注釈書を中心として考えてみよう。

まず、朱子『章句』を否定して、『礼記』大学篇への復帰を表明するのが、荻生徂徠『大学解』と井上金峨『大学古義』である。これら古学派の注釈書には、朱子学そのものが儒教経典の原義を大きく歪曲してしまったとの基本認識がある。そのため、朱子『章句』の部分的な修訂ではなく、『礼記』そのものへの回帰を目指したのである。これに近い立場が、朝川善庵『大学原本釈義』である。この書は、『礼記』大学篇に準拠しつつも、一部に独自の改訂を加えている。『礼記』を改訂するという点はやや異なるが、基本的に朱子『章句』に依拠しないという点では、徂徠らと同様の立場に立脚している。

これらとは正反対の立場にあると言えるのが、古賀精里『大学章句纂釈』『大学諸説辨誤』である。これは、基本的に朱子学に立脚し、『章句』本を底本とする注釈を掲げている。まさに朱子『章句』に準拠した注釈書である。荻生徂徠『大学解』などとは対極に位置する注釈書であると言えよう。

第三の立場として挙げられるのが、伊藤仁斎『大学定本』である。これは、朱子『章句』を基にした改訂本であると言える。古学を標榜した仁斎は、『章句』にそのまま従うことをよしとせず、独自の改訂を『章句』に加えたのである。但し、『章句』を底本とする点においては、朱子学の基盤に立脚していると言える。

では、こうした状況の中において、履軒の『大学雑議』は、どのあたりに位置すると言えるであろうか。『大学雑議』は、朱子『章句』を基にしながらも、それを大胆に改訂している。その点において、仁斎の『大学定本』の立場を、もう一歩進めたものであると評価できる。そこで、これらの相対的位置を視覚的に明らかにするために、図3を掲げてみよう。これは、右端に古本（『礼記』大学篇）、左端に改訂本（朱子『大学章句集注』）を置いたとき、それぞれの文献が、その間のどのあたりに位置するかを相対的に示したものである。

図3　『大学』関係書の相対的位置

古本（『礼記』大学篇）

荻生徂徠『大学解』……『礼記』大学篇への復帰を表明

井上金峨『大学古義』…『礼記』大学篇への復帰を表明

朝川善庵『大学原本釈義』……『礼記』大学篇に準拠、一部改訂

中井履軒『大学雑議』……章句本を基にした大幅な改訂本

伊藤仁斎『大学定本』……章句本を基にした改訂本

古賀精里『大学章句纂釈』『大学諸説辨誤』……章句本を前提とした注釈書

改訂本（朱子『大学章句集注』）

この図から明らかなように、履軒の『大学雑議』は、朱子『章句』からはかなりの距離を置いていることが分かる。図の中では、むしろ中間的な位置にあると言える。但し、履軒は、決して、『礼記』大学篇への復帰を目指した訳ではない。また、『礼記』大学篇と朱子『章

句』とを折衷しようとした訳でもない。この図では、結果的に、図の中央寄りに位置するというだけであって、履軒の基本的な意識は、やはり、朱子『章句』を基盤とし、それを改訂するという点にあったと考えられる。

結　語

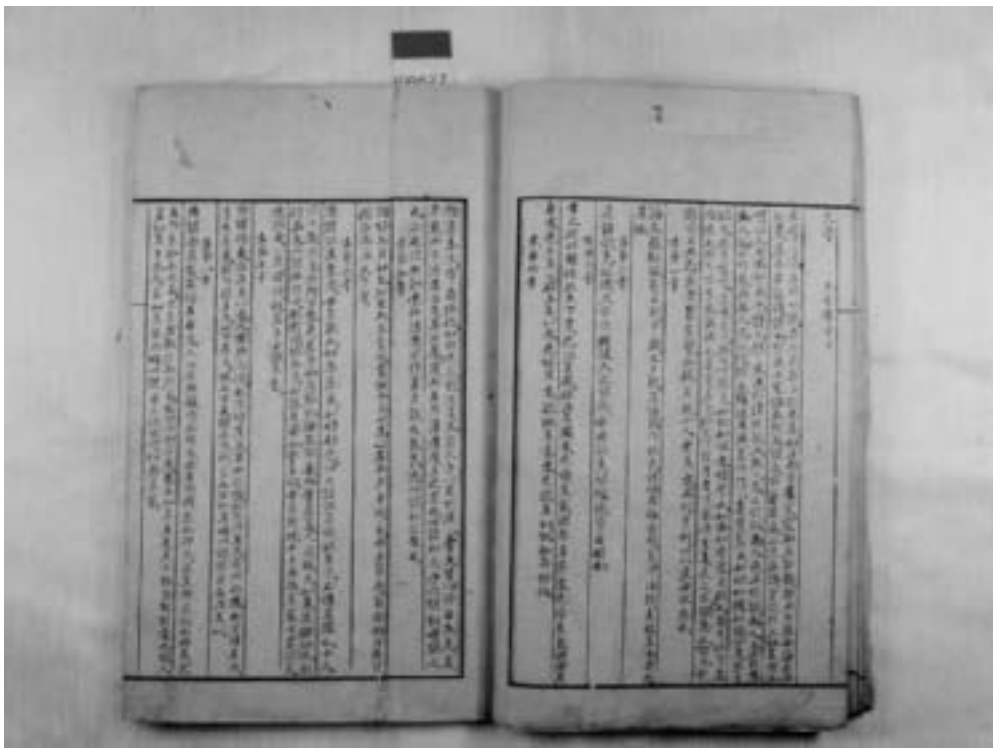
従来、懐徳堂学派の学問的性格については、「折衷学派」とみなす評価がある。初代学主の三宅石庵は、朱子学・陽明学・古学などを柔軟に取り入れ、初期懐徳堂では、朱子学と陽明学のテキストが同時に使用されたと伝えられている。しかし、第二代学主中井甃庵の時に厳格な朱子学の路線が確立され、それは、その子である中井竹山・履軒兄弟にも継承されていった。

但し、彼らは、朱子の立場をそのまま踏襲した訳ではない。甃庵について言えば、朱子の『家礼』に基づく『喪祭私説』という文献では、『家礼』にそのまま従っている訳ではない。むしろ、冠婚葬祭という最も基本的な礼について、朱子の精神は尊重しながらも、日本の住宅事情や庶民の経済力に配慮して柔軟な意見を提示している。(1)

履軒も同様である。『大学雑議』においては、朱子『章句』を基にしながらも、その基本構造を改編し、個々の解釈についても、時に厳しい反論を加えている。さらに、『大学』そのものについても、例えば、「凡そ此の篇、文辞未だ粋美ならず、『中庸』に譲ること数等」（第四章注釈）と手厳しい。また、そもそも「雑議」という書名そのものが『大学』に対する履軒の評価を端的に表している。朱子学という同じ土俵の上ではありながら、履軒の思想的立場は、かなり際どい位置にあったと言えるであろう。

注

（1）この点の詳細については、拙稿「懐徳堂の祭祀空間――中国古礼の受容と展開――」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』第四六巻、二〇〇六年）参照。



大阪大学懐徳堂文庫所蔵中井履軒手稿本『大学雑議』

中井履軒《大學雜議》的思想史的位置

湯　淺　邦　弘

江戶時代大阪的學堂「懷德堂」，是當時代表日本的知識據點。特別是第四代學主中井竹山和其弟中井履軒時，迎來了其全盛時期，取得了眾多的學術成果。本稿主要就其中的, 中井履軒的《大學雜議》一篇進行探討，以明確其在思想史上的位置。

另外，本稿的研究活動, 也是作為在中國和日本進行的《儒藏》編撰事業的一環, 來展開的。

首先, 確認一下江戶時代的儒學家們必讀的, 朱子的《大學章句集注》在思想史上的位置。

《大學》，本來是作為《禮記》的一篇，在漢代以後開始流行的。〈五經〉之一的《禮記》一直被尊崇為儒教的基本文獻。但是魏晉以後，隨著道教和佛教的抬頭，儒教漸漸失去了其思想的活力。其間，對儒教大膽實施改編的是南宋的朱子。朱子爲了取代迄今的〈五經〉，把《孟子》《論語》，以及從《禮記》中，把〈大學〉〈中庸〉等各篇獨立出來，合為「四書」加以彰顯。因為他認為直接記錄了孔子、孟子的心聲的, 正是此「四書」。

但是，在重編「四書」之際，對向來的文獻內容加以了很大的改動。就《大學》而言，其開頭部分是繼承了《禮記》的大學篇。但朱子把整個內容分為開頭部分的「經」和對其進行解說部分的「傳」。而且, 把《大學》全篇理解為由傳, 對經的「格物致知」「誠意」「正心」「修身」「齊家」「治國」「平天下」等所謂八條按順序加以解說的構造。另外, 對傳第五章的原文的缺欠部分, 則大幅加以補筆, 這就是朱子《章句》的基本姿態。

對此, 中井履軒《大學雜議》的立場, 該如何理解呢?

首先, 大體上可以說, 履軒的《大學雜議》很大幅度地改訂了朱子的《大學章句》。那麼, 履軒的目的是拋棄朱子的《章句》, 而回歸《禮記》的大學篇嗎?不, 絕不是這樣的。基本上還是在朱子《章句》的基礎之上進行的修訂。

具體而言, 履軒并未採用朱子《章句》中, 分成「經」「傳」的框架, 而是改將《大學》全體重新劃分為十一章。

接著, 刪去了朱子《章句》的「傳」第四章末尾・第五章開頭部分的重複的四個字「此謂知本」。

而且, 還有一個很大的不同點, 就是在相當於朱子《章句》的「傳」第五章的相應部分。作為「傳」的第五章, 朱子進行了大量補筆的部分, 履軒則皆不予採用, 而全部進行刪除。另外, 因朱子《章句》的「傳」的第十章的一部分也具有衍文, 於是也對其施以了改訂和刪除。

如此, 履軒一面基於朱子的《章句》, 一面又對朱子所示「經」「傳」的大體框架完全不予採用, 而嘗試獨自的重編。另外, 對《大學》的內容, 亦如「凡此篇，文辭未粹美，讓於《中庸》數等矣」（第四章注釈）般加以酷評。而且, 從最初「雜議」的書名上也很明顯地表達出了履軒對《大學》的評價。可以說, 在朱子學這樣一個大的框架中, 履軒的思想立場已經處在了一個極端邊緣的位置。